

9. 理学部

(分析項目Ⅰ 教育活動の状況 27)

(分析項目Ⅱ 教育成果の状況 28)

分析項目 I 教育活動の状況**〔判定〕 特筆すべき高い質にある****〔判断理由〕**

教育活動の基本的な質を実現している。

教員と学生が一体となり、数理を基盤とする新しい研究領域を拓く若手人材を育成する取組である「数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム」では、毎年度 10 件程度の分野横断的スタディグループが提案されている。また、数理科学に優れた才能を持つ学生を受け入れる特色入試では、倍率 15 倍を超える実績を挙げている。さらに、入学時に日本語能力を問わない留学生の受入、及び高大接続を活用した学生の育成に取り組んでいる。

〔優れた点〕

- 「数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム」（略称：MACS 教育プログラム）は、平成 28 年度より始まった、京都大学・大学院理学研究科の概算要求事業である。これは、数理を基盤として理学 5 分野を横断する融合研究を推進し、狙ってもできない新たな学問分野の自発的創出を促すともに、分野横断的課題の発見と解決に学際的な視点から取り組むことができる優れた若手研究者や科学人材を育成するための教育を行うことを目指して活動を続けている。MACS 教育プログラムが目指す分野横断的教育研究の柱となるのがスタディグループ(SG)である。これは、様々なテーマの下に複数の専攻の教員と学生が集まって、自由な形式で議論や実習などを行う教育研究企画を指し、これまでに各年度 10 前後の SG が提案され、活発な活動が行われている。
- 京都大学が実施する特色入試において、理学部は数理科学試験を実施し、理学部のアドミッションポリシーに基づいて、数理科学の分野で極めて優れた才能を持つ学生を受け入れている。開始以来、毎年ほぼ 10 倍以上、直近の 2 年は 15 倍を超える高い倍率での選抜が行われており、特色入試の趣旨に合わせた特徴ある学生の受け入れに成功している。また、入学後、多くの学生がその能力を活かして各専門分野に進んでいる。この成果を踏まえて、来年度の特色入試からは理学部生物科学試験を開始し、数理科学試験とは異なる観点での特色ある学生の受け入れを拡大することで、受入学生の多様化を図っている。

〔特色ある点〕

- 平成 30 年度より開始した京都大学の留学生プログラム Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program) に、理学部も令和元年度よ

り参加し、「受験時に日本語能力を問わない優秀な海外の学生」の確保に努め、受入学生の多様化を図っている。2020 年度には予備教育を終えた 3 名の留学生が入学している。また、受け入れに際しては、Kyoto iUP 生が日本語能力を取得しやすいカリキュラムを設けている。

- 京都大学の教育理念である「対話を根幹とした自学自習」に基づいて主体的に学びを究めようとする優れた高校生を対象に高大接続プログラム ELCAS（最先端科学の体験型学習講座）を実施している。学部生・大学院生がアシスタントとして、近畿地方を中心とした高校生との対話を進め、理学の学びの支援をしている。学部生・大学院生が主体的に学びを進めようとする高校生と接することで、理学研究についての想いの涵養をしている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。